夕刊フジ　2018年7月14日

ドクター＋フジ

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㊷ 桂 歌丸

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

「山田君、楽さんの座布団、全部持っていきなさい」

「まだくたばらない」「死体がしゃべった」など、円楽さんの「歌丸死亡ネタ」と座布団没収のやりとりは『笑点』の名物でした。死を笑いにできる、唯一のテレビ番組だったと思います。

しかし数年前から、歌丸さんの健康状態が悪そうで、さすがにもう…と視聴者がヒヤヒヤするのも何のその、2人の掛け合いは続きました。まるで言霊を逆手に取るかのように。死をネタにできるうちは師匠は死なない…そこに円楽さんの深い愛を感じました。

歌丸さんは2009年に慢性閉塞性肺疾患（COPD）で入院。その後も、毎年のように入退院を繰り返します。

15年には腸閉塞にも苦しめられ、昨年の雑誌のインタビューでは、「意識がないまま病院に担ぎ込まれたら、人工呼吸器だとか、そういった延命装置をつけるのは絶対にやめようと（妻と）話し合っているんです。意識がなくて何もわからないんじゃあ、つまらないもん。延命装置をつけても治らない人を何人も見てきましたしね」と語っています。死への覚悟ができていたようです。

「えっ？　でも歌丸さんは鼻からチューブをつけて落語をしていたよ？」と思った方もいるでしょう。

しかし、酸素吸入＝延命治療とは限りません。その意味合いはその人の病状によって大きく違ってきます。高座に上がるためにやれることは全部やろう…ここ数年の歌丸さんからはそんな気概を感じました。その姿は、多くのCOPDの人を勇気づけたはずです。

そして今年4月14日、国立演芸場で昼夜2回の高座に上がった後、体調が悪化。息苦しさを感じて、酸素を主治医に言われた量より勝手に増量したそうです。

しかし、COPDでは酸素を吸い過ぎると今度は血中に二酸化炭素が溜まってしまい意識障害など重篤な事態を引き起こしてしまいます。ですから、COPDの人は酸素の量を自己判断で増やすのは絶対にやめてください。

歌丸さんはその後入院、全公演をキャンセルしました。この頃に絶命してもおかしくない状態だったようですが、奇跡的に持ち直し、病室にお見舞いに来たお弟子さんに、苦しい様子を見せながらも、ギリギリまで小言を言っていたそうです。最期の2カ月は、本人の望みとは少し違う日々だったかもしれません。しかし、それよりも落語への思いが勝ったのでしょう。

7月2日、横浜市の病院で死去。81歳でした。1週間後の『笑点』で、円楽さんは泣いていました。「最後に言わせてください。じじい！　早すぎるんだよ!!」

山田君、座布団全部…の声はもう、聞こえませんでした。

じじい！早すぎるんだよ！